



The 33rd  
Annual Meeting of  
Japanese Society of Pediatric Intractable Asthma  
and Allergic Diseases

# CLINICAL PRACTICE FOR SKINCARE COACHING — better Communication with your patient

2016.7.17(SUN)  
12:00 - 12:50

第33回 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会  
教育セミナー

開催日 2016年7月17日(日) 12:00～12:50

## 第1会場(橘)

座長：近藤 直実先生(平成医療短期大学長/岐阜大学 名誉教授)

演者：矢上 晶子先生(藤田保健衛生大学 皮膚科学講座 臨床教授)

本セミナーは整理券制になります

● 配布場所：仙台国際センター 2F 総合受付付近 ● 配布日時：7/17(日) 8:30～12:00

※整理券はセミナー開始後5分で無効となります。

臨床現場でのスキンケア指導  
～患者さんとのコミュニケーション～

# 臨床現場でのスキンケア指導 ～患者さんとのコミュニケーション～

矢上 晶子 先生

藤田保健衛生大学 皮膚科学講座 臨床教授

アトピー性皮膚炎は、適切な診断や重症度の評価を行った上で患者ごとの原因、悪化因子の探索と対策、スキンケア、薬物療法を行うことが治療の基本となるが皮疹を良好な状態に維持することは容易ではない。原因や悪化因子の探索と対策は、年齢により異なり、2歳未満の場合には食物、発汗、環境因子、細菌真菌などが主となり、13歳以上の場合には環境因子、発汗、細菌真菌、接触抗原、ストレス、食物などが挙げられる。よって、年齢と共に原因・悪化因子のパターンが変化していくことを念頭に個々の患者に対応していく必要がある。また、スキンケアでは、皮膚を清潔に保つこと、保湿をしっかりとすることなどを適切に指導することが大切である。近年は、スキンケアの重要性が特に注目されており、患者が正しいスキンケアを自ら継続して行うことは皮膚をよい状態に保つための大きな柱となる。薬物治療では、ステロイド外用薬により、炎症の鎮静が十分に得られた後も、乾燥およびバリア機能の低下を補完し、炎症の再燃を予防することを目的に保湿剤やタクロリムス軟膏などステロイド薬を含まない外用薬を用いたスキンケアや外用薬による治療を継続する。すなわち、炎症が落ち着いている皮膚に対してもスキンケアや外用薬治療は継続すべきである。よって、アトピー性皮膚炎は、様々な原因、悪化因子により症状の増悪軽快を繰り返す疾患であることを前提に、ステロイド外用薬やタクロリムス軟膏、保湿剤などを適切に用い、また、症状に応じたそれら使用法を保護者や患児に正しく指導していく必要がある。本講演では、アトピー性皮膚炎のスキンケアの重要性に着目し、治療現場における患者や保護者とのコミュニケーションの取り方や外用療法の指導法などについて、皮膚科医の立場から述べたい。

## 演者ご略歴

---

- 1996年 藤田保健衛生大学医学部 卒業
- 2002年 藤田保健衛生大学医学部大学院 医学研究科 博士課程 卒業  
「ラテックスフルーツ症候群の抗原解析」で取得  
藤田保健衛生大学医学部皮膚科学 助手
- 2004年 藤田保健衛生大学医学部皮膚科学講師
- 2007年 国立成育医療センター研究所免疫アレルギー研究部へ国内留学（斎藤博久部長）
- 2011年 藤田保健衛生大学医学部皮膚科学 准教授
- 2016年4月より現職

## Memo

.....

.....

.....

.....

.....

.....